

イデックスオイルレポート ~For a week~

2022/12/2作成 (株)新出光

【概況】<中国コロナ感染者の動向～ロシア産原油200万バレル減産？>

●25日、中国国家衛生健康委員会は25日、新型コロナウイルスの感染者数が2日連続で過去最多を更新したと発表されました。中国で感染が再び拡大するにつれて、防疫のための関連規制が厳格化され、同国内でのエネルギー需要見通しに影響が及ぶとの見方から、原油が売られ相場は**76.28**ドルへ続落しました。

●28日、週末に中国の各地で厳格な新型コロナウイルス感染対策への抗議活動が広がったことを受け、同国の景気減退に伴うエネルギー需要見通しへの警戒感が強まりました。これを受け、原油相場は未明の時間外取引で一時的に73.60ドルと、2021年12月下旬以来約11カ月ぶりの安値を付けましたが、OPECプラスが12月4日に開く閣僚級会合で減産を決定するかもしれないとの見方が再び原油が買われ相場は**77.24**ドルへ反発しました。

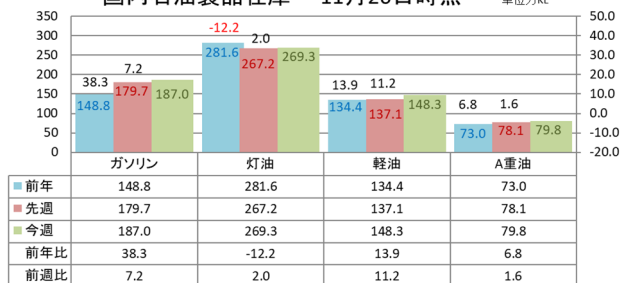
●29日、中国国家衛生健康委員会はこの日、高齢者の新型コロナワクチン接種強化に向けた方針を発表しました。前週末に新型コロナウイルス感染を封じ込める「ゼロコロナ」政策への抗議活動が中国各地で拡大したことを受け、同政策が緩和されるとの見方が台頭。これを受け世界最大の石油輸入国である同国の需要が落ち込むとの懸念が後退し相場は**78.2**ドルへ続伸しました。

●30日、国際エネルギー機関(IEA)のピロル事務局長は29日、ロイター通信に対し、ロシアの原油生産は2023年第1四半期(1～3月)末までに、日量約200万バレル減少するとの見通しを示しました。また、中国国家衛生健康委員会はこの日、中国本土で新型コロナウイルス新規感染者が29日に3万7612人確認され、2日連続で減少したと発表。エネルギー消費大国である中国の需要減退を巡る懸念が幾分和らぎ、これらの強材料を背景に原油が買い進まれ相場は**80.55**ドルへ続伸しました。

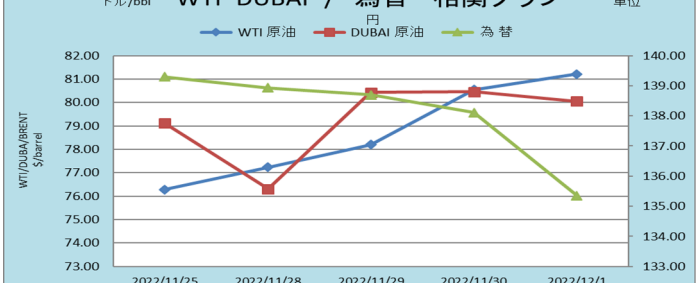
●1日、パウエル米連邦準備制度理事会(FRB)議長は前日午後の講演で、早ければ今月の米連邦公開市場委員会(FOMC)で利上げペースの縮小が妥当だとの見解を表明し、政策金利を0.5%に縮小する可能性を示唆しました。これを受け、この日の外国為替市場では主要通貨に対しドルが下落し、ドル建て商品の割安感が強まり、原油買いが先行し相場は**81.22**ドルへ続伸しました。

12月2日 16:00現在 WTI原油 81.05ドル 為替 1ドル 136.60円

国内石油製品在庫 11月26日時点



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 相関グラフ



【製品卸価格】<12月スタートは、月変わりのリセット値上げで市況は若干改善か>

◀今週▶ 今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは、「-5.0円」、補助金は、「-19.5円」、都合「+1.2円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの28日時点の小売価格平均は167.6円となっております。

◀12月3日以降▶ 次回の元売り改定は、原油コストは、「-0.5～0円」、激変緩和補助金は「-18.9円」の見込みで、都合「+0.1～+0.6円」の値上げ改定の予測となっています。12月に入り各油種11月の価格レベルからは、いったんリセットされ市況は上昇しました。市況連動玉や月間平均玉を持つ業者は、今月の原油動向がまだはっきりしないため特に踏み込んだ価格を提示せず様子見の状況です。来週の原油コストが上昇しなければ次回の価格改定以降から販売に本腰を入れてくるかもしれません。それまでは、元売週間玉を持つ業者が市況をリードするものと思われます。補助金を加味したガソリン輸入価格も11月のレベルからは上昇してきているため中京、阪神地区の油槽所ガソリン価格も上昇してきました。しかし全国的に需要は、回復していないため各社月初から早めの枠消化を狙い販売強化してくるものと思われます。

	次回元売変動予測	
	12/8～	元売変動予測
ガソリン	→	+0.1～+0.6
灯油	→	+0.1～+0.6
軽油	→	+0.1～+0.6
A重油	→	+0.1～+0.6
L S A	→	+0.1～+0.6

※原油コスト「-0.5～-0.0円」
 ※激変緩和補助金「-18.9円」
 ※現時点での予測です。

【次世代エネルギー】<水素旅客船、東京湾を初航行>

水素を燃料とする世界初の旅客船「ハイドロびんご」が10月下旬、東京湾を初めて航行し、東京都の小池百合子知事が試乗視察しました。船を開発した企業は二酸化炭素(CO2)の排出量が大幅に少ない環境性能や乗り心地をアピール。小池知事は環境政策に前向きな都の姿勢を強調しました。船を開発したのは、広島県尾道市に本社を置く企業「ツネインクラフト&ファシリティーズ」(以下ツネイン社)。脱炭素化などエネルギーの安定確保に取り組む都と関係をつくり、東京湾での航行が実現しました。船は水素と軽油(ディーゼル)の混成物を燃料との事です。ツネイン社によると、水素と軽油の混焼エンジンを搭載した客船は世界初だとの事。軽油のみで航行する同型の船に比べCO2排出量を約50%低減できるとの事です。試乗会では船の「出力、も披露された。航行中、通常の航行速度の10ノット(時速約18.5キロ)程度から25ノット(同約46.3キロ)程度に加速。エンジン音が高鳴り、船上からの景色は驚くほど早く流れるが、大揺れすることなくスムーズに航行できることをアピールされました。

一方、実用化や普及に向けた課題は少なくないとの事で、開発担当者は「水素燃料を供給するシステムが確立していない」。船への燃料供給は水素ポンプのユニットを積み込む仕組みだが、東京湾周辺では、船舶向けに水素燃料を充填できるシステムがまだ整っていないという。また、「環境負荷低減のため、水素の比率をさらに高められるよう研究を重ねていく」との事です。

【出典】 <https://www.sankei.com/article/20221103-6AQLW3PW5ROOHDKGY63FKJNEGA/>